

72

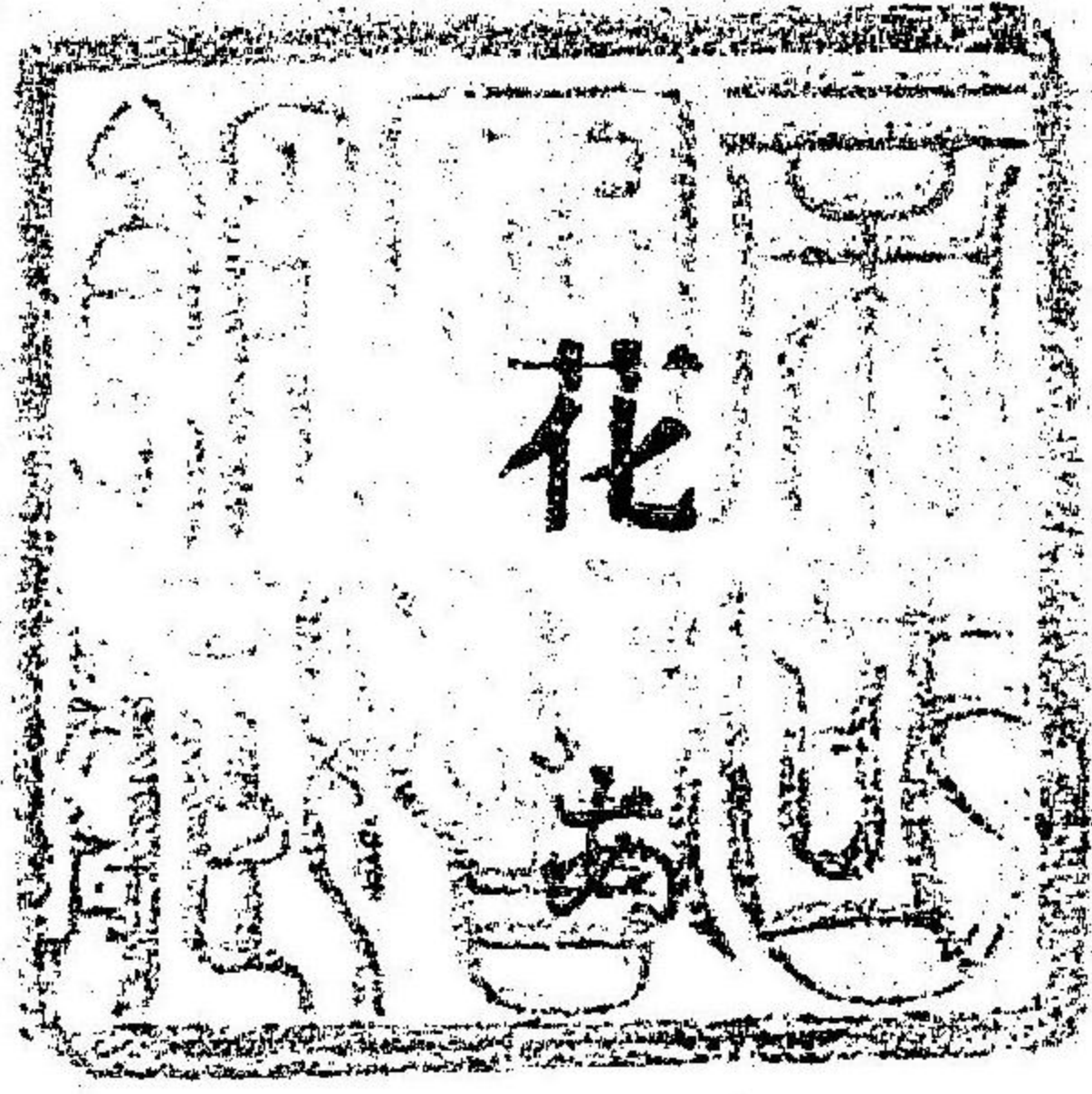
2

本

卷

~~359~~

~~49~~



ふ

ひ

山
中
波
泉
編



特々
2

目次

杜楠 夕暎 清朝 鐘若 迷花 國牧
あ
の 分
ふ
家香 雲像 與晴 音日 宮壇 寺草

...

...

...

...

...

...

花あふひ

杜の家

夕されば杜のわが家とおどつる、白き雲にも
人の戀じき

夏の磯おん頬に似しとさくら貝ひろひてめで
し戀もしける身

小川眞清

美しう百合の香うかべ夕霞は十歩の前の君の
みけり

聞は今さびしう小野をねはひ来ぬうねりて白
き流のこして

打ちうてば石にも熱き火を見ゆる冷たき君よ
何にたとへむ

嬉しくも二なき花こそ開きけれ君を請せるわ
が胸の園

一一一

五六人舟なる人は皆ねなじ紫袴を着けたる夏
のみづうみ

一一一

若葉かけ早鮎ぞのぼる谷川の瀬の音清き夏は
来にけり

早月野やいはらの花の香を清き人と別れて月
ふみ来れば

初夏や茶摘にきけふふる里の唄の中なる人お
もひ居ぬ

夕小みち野茨しろき花がげに人とたゝすみき
く時鳥トキトリ

老鶯を青葉の森を軒近う寝ながら仰ぐ草の家
かな

たゝすみて琴の音ぬすむ魔もわらむ薄う月照
る卯の花の垣

歸り來しつばくら見れば何となうたより待ち
えし心地する哉

君とすみて籠飼ひつゝわらひ日のたのしと思
ひ桑植はてぬぬ

わが思ふ胸の家にかへると燕は古き巢を懸
ひて來ぬ

わが胸のおもひの中よいつも居てたぬすなつ
かし美しき君

かなでます小翠の主をまつかしきわやめ花咲
く初夏の家

雨あがり若葉の中に紫の紅の衣はす人うつく
しき

相おもふ二人のこしてものみなの滅びん時と
ふと思ひける

ほどとぎす森の闇まにかくしたる金鼓とり出
で打つ音と聞く

はのかにも湯の香たゞよふ谷川の流の末に百
合の花咲く

楠の香

村瀬 馨花

楠の香に森の眞書とさびしみのわくら葉よと
く我肩を打て

明易き夏の朝霞みづうみの水よ醜せる嶋夢の
こと

乙女だち扇めしませ紅よ青よ京は三條風よき
ところ

蕙風に靡ねるして歌賜へど髪かゝる女よ
ろしも

かゝる夜や水底のさされさゝ波に眞珠産れじ
磯月のさま

七彩の大輪つくりて緑野は虹の下吹く風の涼
しき

湖畔の乙女舟して菱とる日よき棹歌に波ゆる
ふ立て

山居しておなじ雲見る遠人のゆふべの歌と閑
古鳥聞く

かゝる夜をめで、訪ひ來しじき人のおもかけ
と見し白蓮の散る

杉の雨傘して上る七湯道苔の花ふひあざこゝ
ちよき

雨衣めして霓裳織らす機姫が杼音らしう五月
雨を聴く

梅雨はれて樹は新なる命得ぬ碧玉ついで夏に
入る日を

君見ぬ日今落命のはらからに遣はむ遣へぬの
せよめき心

若き日を拗ねても見たるあえかさの人なつか
しき五月雨の夜や

なでしこは物を案ずる短檠の愁の人に似て雨
に咲く

やぶ蔭や黄梅れつる梅雨晴れを鶏に追はれし
稚さ思ふ

眞清水に百合の影杓ひ山の朝み息にふる、幸
思ふかな

ろいろ来て繁りの中の櫻木に昔の人の名と呼
びて見ぬ

いかすちす罪の女男の亡ぶ日と晦暝に立つ火
の柱かな

眼を閉ぢて感想にくるゝよき人の停たどむかた
山百合の花

艦窓の圓きに映る浦の灯を見まじとて見し國
を去る夜や

あゝ惱み湖花の露のことくくにさびし運命の
ありと覺はて

ほどゞぎす細き爪つめしてかいならず十三弦じゅうさんげんの柱はしら
に消ゆる聲

あゝあゝ

早坂掬紫

あらゝぎにゆふへ雲呼ぶ皁月さつきの日小雨こさめもよひ
の風ぞつめたき

朝の家湖水あさのいへうみづの雲のうるはしら紹蚊帳せうもんぢやうはづせば
潮の香みち來く

菅の雨ひと日や音の翡翠ひすいが歌まぬらす沼
の家かな

水盤すいばんにあやめを活けて日記にっぎする人美しくしう灯とう
にゆすられぬ

野の莊のあさの寂寥しじまと夏草の花香めぐりて小
露つゆあけぬ

霸王じやうわう樹じゆやつゆの七日ななひは花もなう寢憂ねうの人の窓
に咲きけり

青葉若葉みどり吹く日と小搖こゆらぎの中に影見る
遠のあらしき

藻の花や五月雨ごごの夕闇を領りやうじてにはふ古ふる
沼ぬまの水に

夏の野やみどり小搖こゆらぐ薫風くんぷうに吹かれて立ちぬ
夢かのやうに

れん籠かごの沈香ちんかほそうたつ教のりの朝のしゝまの人
に蓮の華散る

森の茂り小鳩こ鳩はろくよこげ吹く風あらしよ
き山の朝かな

人どわれもだして立てる夕夏野草香せまり來
胸より胸に

朝曉や一本百合は香にいであながれにほふ
野のさゞれ水

そゞろはし涙れとして月に凭る子なせ思ひ出
る皁月の宵よ

あさ寢髮潮の風吹くればしまに入うつゝなう
遠の雲見る

夕 雲

伊藤紫峰

魔の雲の落ちぬと見ればあらゝぎのゆれて夕
日よわかくと立つ

咲き出でし君花芥子になぞらへてわれは黙想
の白蓮の花

夏やせぬ戀を捨てぬる身にしあれば心の眞洞
鬼も住むべし

闇の扉をふたつに断きて稻妻は杉の御堂を青
う照しぬ

眺むれば松原のかた狭霧して菅の小笠の人う
まれ行く

野の朝や露はの白う草の家にけぶり立つ見ゆ
大古のさまに

夕ぐれを匂ひ冷たき紫陽花になみだ落しぬく
みがみの人

夢の宮あこがるゝ日の朝あけを柴の小窓に鐘
の音をずる

緋衣かせにひるがへし行く行脚僧軒ひくらし
て燕飛ぶ朝

垣ぞひや水引の花流れ行く山家の椽よひるの
月みる

朝雨に傘をもさくで嶋乙女潮の花ふじくしき
ねもひに

朝風や小笹とすべる水晶の露は乙女のなみた
と思ひぬ

青照りや森影の庵ふるうして老僧ひとり普門
品見る

さみだるゝ夕れぐらさ若葉かげつま琴の音の
ゆかしみを聞く

牧の子が牛に乗る見ゆなつぐさの彼方に遠く
夕雲のして

憧 憬

南 薰 風

あこがれの我がの蝶は野の朝を花より花に行
え知らなく

雲うくや大白蓮の花びらの散るかど見たり夏
の野の朝

安からぬ目をして雨の雫にも耳そばだつる我
をあやしむ

海草の香どなづかしき青貝に夕月の照る磯か
たり行く

花葵かをる衣着て思ふひと歩を運ぶると夕風
にちる

ほととぎす野茨こぼると薄月の道に別れて歩
うつす刹那

月見草羅の衣着て女の童襟にすゝめる夕ぐれ
の家

橘の花のかをりのなづかしき野の家を吹く六
月の風

草花の萎るゝ如きかたはらに火を喰ふ鬼の罵
を聞く

樂しげに花と遊べる蝶を見てねたひと同じよ
くしみをしぬ

朝花に露おくに似るうるほひを君が瞳に見る
ぞうたてき

はとゝぎす潮の音どよむ磯寺に鐘のなるかな
青嵐吹く

はかなげに病める乙女のひかりなき睡を思ふ
夕ぐれの星

まぼろしに君が方より炎たく上ゆるぎ來ぬ戀
の火車

何の音か小ぐらき胸の鈴間よりひせぶが如き
響聞くかな

清 興

石垣 清 華

雨七日小木曾のはたご今はとて出で立つ朝に
君を見いでぬ

興そゝろ森の茂みにわけ入りてはからずさゝ
ぬ晝はとゝぎす

鑿城の海沖より暮れていさり火の見えかくれ
する磯の家かな

人の子の淺き心にともすれば神のみ旨をつら
しどわびぬ

長良川鶴つかひも見ず旅やかた古りしたもひ
を酒にやる宵

柿の花たゝすみて居る夏瘦せのかぼそき肩を
すべりて散りぬ

世を知らぬ森の古家我れに似し人もやあると
うかいひて見ぬ

高嶋文之助

歩じゆけば音さくさくと心地よき真砂地つと
く磯の路かな

ながらへせよき幸あらぬ我なれば死の日待た
るゝ夕もありぬ

いと清う君を送るゝなんすれど暗涙すなるわ
が心かな

君を見て胸の小琴のさゝなりし日もありしか
な華ぐ夕

あたくしかき風する日には南國の海をわたりにて
のばくらめ來り

卯の花の咲ける夕を月出でぬ君と行く夜の美
しきかな

夏の風青き麥吹き草野吹き樹々の若葉の香を
運び來ぬ

宵月夜離亭にひとりまろび居て竹に隣れる君
が琴きく

朝

晴

高橋・紫苑

朝晴や川下ひろう日は照りて欄にし凭れば水
の香ぞする

涙ながら人に別れて山越えてうつゝ心よ驛路
を過ぐ

うす霞よつゝまれながら朝顔は夢うつくしま
家に咲き出ぬ

や、高き丘邊に立ちて夕潮を遠く見るかな風
雲を吹く

いさゝ川いくつの里か流れ来しやさしき君の
方もへにけむ

眺めやればうらるゝ戀し母の家小雨にけふる
山のうがひの

金龜子葉うら這ひ行くつたかつら微風に揺れ
て朝晴にけり

林間に夕日ずもるゝ葉がくれや唐の繪めきし
小家涼しき

たきの瀬の石わらはなる岡の家小女子の居て
鮎を賣るかな

梅雨の日や小窓を閉ぢておどなしうれもちや
の琴をかき鳴らし居る

水色の狩衣の人や白馬して塔をよぎりて若葉
に入りぬ

鐘音

村田鶴渚

瓜畑や蚯蚓よき唄よすからの月に蚊帳吊る戸
もさゝぬ家

鐘聞けばたれならなくに遠つ世に去にける人
のひたも待たるゝ

野ゆくどきふともほどけし瑤瑤の草にかくれ
て草苺かな

一三一

蚊帳越しや遠いかづちを聞きつゝも明石涼し
き船の灯を見る

一三一

山曇る朝を山越ぬ空馬の頬被る男に啼くほど
ゝぎす

妹が家は紫ふくびふくよかの菖蒲咲くなり明
け易き風

をり立てば雨蛙なく夕毎を馴れて水まぐ桐多
き園

返し待つひまを折戸に案内なき牡丹を愛でぬ
み歌使ひは

卯の花や朝飯はやき山の宿鞍置く馬ふ片わか
りして

日に焼くる石とびとびになでしこの咲くや網
賣る椽高き家

柳葉や風かをる沼を前にして家鴨飼ふなる屋
根ひくき家

若き日

千葉高軒

若き日は煩悶も戀も胸の扉に秘めかくされて
はにかまれぬる

まぼろしの影美しき夢さめてうつゝながらに
なほ思ふかな

五月雲いかづちのせて野にそゞ大雨の中を
啼く閑古鳥

五月雨や背月の小川を興がりて早苗の舟に蛙
のりゆく

いくたびか胸に浮びし面影の慕はし友のふと
訪ね來ぬ

おん胸の泉をくみて新らしき生命を得たるわ
が心かな

夏來ればろゝるに戀しみ手とりて莓採りせし
故里の山

— 5 —

— 6 —

菅原 清

はとゝぎす啼くや青葉の岡に人と立ちけり卯
の花月夜

君と住む新らしき家につばくらの雛うだちぬ
南の軒

土赤き砂漠の中にひとりあるさびしき思ひ人
と別るゝ

五月闇ものねぢけする妹と行々子さく山の家
かな

問にあり吾が得むつひの運命に思ひたぐひし
花ちる夕

夏草の二尺にあまる中わけて人と並びて海遠
くみる

吾が胸にそのゆゑ知らず例ならぬときめき
こゆ君とある日は

凋落のさびしさ見せて緋牡丹の花は二度れぬ
たろがれ時を

— 一 —

迷宮

千葉宗藏

わろがれの夢の宮居の花園に足よわき君を見
失ひつる

いさゝかの罪得し日よりかくれ家よをののく
如き我がねもひかな

濃青なす稻田涼しく吹き渡る風よき日なり晝
燕とふ

— 一 —

黒雲の軍勢なして魔を攻むる遠いかづちの鳴
りやまぬかな

大場 愁 雨

雨れもふ夕べかぐろき大木の森に啼くなるほ
とゞきすかな

早月野や美しう香れる野茨にやさしき人をふ
と思ひけり

白百合や君どありにしそのかみの幸多き日を
思ひて泣かる

待ちわぶるれもはれ人が白き頬の香さながら
吹く夏の風

鈴木 夕 泉

わななきぬ藤花にまゐる清き身の涙する日も
あれなど思へば

雨にしてみ山ぞあけぬ初夏の若葉の中の御社
のいろ

夕顔の花咲き出でし月影にひとり淋しく君れ
もひけり

夕雲や磯のはたごに帆を敷へ涙する日を幾日
かへぬ

鈴木氏亭

夏河や城をめぐりて雨白う晴間はれまを夕日
さす見ゆ

月白う穂に匂ひける麥の秋玄女のうたは城に
暮れけり

化粧室やまひるしづく小走りの紅の風吹く
人さめにけり

—四—

花 葵

保井紫杏

花あふひ輪に列びてつゆ草のかつきと見ゆる
苑の朝かな

あやめ活けて皐月雨降る今日もまたかへらぬ
人をねもひ暮しぬ

菅原甚

流れゆく大野の水はしろがねの蛇にしも似て
薄暗をゆく

—五—

蓋微東ね暗に一夜をさらしたまぬ涼しき朝の
水を得ばやと

中澤鼎介

赤き日は湖よかくれて緑なす雑木林に夕風の
する

温泉の宿や歌にうみては欄よりて魔王のと
とき山の雲みる

飯塚夢袋

山寺は夏の木立のかげにして鐘かすかなり雨
降る夕

— 四 —

露ひくきみどり大野の野づかさや朝風かをる
姫百合の花

渡邊白雨

涼風や玉簾くる音のして川にのみし亭はひ
らさぬ

擬寶珠の花咲く庭に歌もなく湯の宿戀うて夕
ぐれに居ぬ

針生五三桐

朝露や白き芙蓉のはなびらをすべりて散りぬ
眞珠のやうに

湖月夜野いばらかをる丘の路ひとり興じて笛
すさびゆく

横澤華京

野の家や灯はのめく梅雨の背いづちともなく
鐘鳴りわたる

いや重き友がわづらひ思ひつゝ夢ならぬ夜を
ほどゝぎす啼く

大崎無外

五月雨の音もかすかに夜もすがら柿の花ちる
庭の面かな

— 52 —

夕立の晴間おそしと鳴く蟬の聲も涼しき森か
げの家

野出尙美

朝曉を水汲む小女袖ふれぬ露うるはしき紫陽
花のはな

菊地淡水

わづらひの妹たもひつゝ只ひとり故里戀ふる
五月雨の夜や

小澤光風

夕涼み小田の蛙のこゑきけばそらに戀しふ
るさとの空

石 森 蝴蝶

花賣のかへりし跡の門の邊に残りてひとり蝶
のあそべる

久 我 久 谿

夕けぶり軒端つゞきにたなびきて蚊遣に暮る
る故里の空

中 野 園 中

小夜更けて落ちゆく月の山の端を啼きてぞよ
ぎる杜鵑かな

菅 原 喜 代 藏

劫風は海をねどらし野の林ゆらぎく〜てやれ
戸に吹き來

— 只 —

黒 瞳

は つ 音

いさゝ川流るゝ水の清うして深きよとみよ結
の群みゆ

ぬばたまの黒髪あらふ小女子が笑顔やさしき
水の朝かな

夕ぐれの野路さびしくさまよへばらつこども
なく杜鵑啼く

— 只 —

よし枝

夏姫がかなづる琴の音にも似て池のあやめよ
雨はろう降る

なづかしきみ歌おもひつ凭る窓の若葉涼しき
はつ夏の朝

夕沙のよせて千鳥の聲すなり鳴海の濱の夏の
夕ぐれ

なき人のおくつきまごころ手向してかへるま
びし杜鵑啼く

あきら

ほどゝぎす汝がこゑきけばうしろにも幼なか
りつる昔おもほゆ

秀子

朝の雨いとしめやかよ降りしきる庭面にしろ
く百合の花咲く

むらさき

ちり果てぬ花もまじりてゆかしくも小雨に暮
る、磯の家かな

夏の磯欄よ遠みるやまうどの額にかゝる夕の
雲かな

國分寺

むらさき

國分寺夕の鐘にたそがれて昔を忍ぶほどなき
すかな

銀杏ちる飛鳥の宮の朝月夜つめたき風に山鳩
の啼く

梅雨晴の畦道づたひ堂塔の榮えし跡も古瓦も
とむる

—五—

かたち見し上古の人の影もなく古鏡ぞのこれ
石の棺に

—五—

大御酒をくみてはぎけん新室の宴もはてぬ月
高うして

風鐸の音に古塔の影のゆらぐ見えて袂すかし
き猿澤の池

あてびとが愛で、み胸を飾りしか色うるはし
きこだま瑠璃玉

酒に酔^さひて舞に興^きせる大室の酒宴^{うたげ}のさまを見
ゆれ^{ゆれ} 穂^ほ

みちのくの野末にひと日天平の古瓦^{かばら}得たりと
京に文しぬ

ゆきくれて多賀の城の邊^へも宿^{しゆく}かれば草笛^{くさふエ}遠し
夏の夜の月

塔^たさびて住^すむ人もなき山寺の破れし築土^{つち}に盡
顔の咲く

牧の草

山中波泉

白薔薇^{びやくげい}御髮^{みかみ}みだれてはのかにも匂^ほふやさしき
頬をおもひけり

やはらかき小草^{こくさ}に遠^{とほ}の連柵^{つら}し羊飼^{ひつ}ふあるはつ
夏の空

金盞花^{きんせんか}睡^{すい}やさしくまじろがす見^みてあるほどに
なづかしきかな

君を見ぬひと日はさびし千秋のながき枕に倦
むこゝちして

みぎわゆく四つの素足にひたひたと夕潮よせ
ぬ花藻かづかむ

夏の雲大河流るゝみちのくの境に入りぬ草高
みかも

わかみどり君を待つなる林間に青の空みるは
つ夏のかぜ

さびしさのこゝろ隈あく君を戀ひ柱に凭りて
暮を待ちけり

ほどゝぎす來啼くうれしもわが妻は髪とくひ
まも山家集よむ

なでしこの花咲く家よをとめ集り琴とる日な
り水無月七日

佛法僧高野は古におん寺のたふどかりける鐘
の音かな

玉籠君がかたへの御袖より牡丹つゞきて涼か
せぞ吹く

雨降ると日てるととどくわがこゝろ變心すら
し人を戀ふれば

夜をこめて湖邊に立てどぬなは探る小女かへ
らず風西を吹く

うとましき心の海に帆を上げて風はなよらに
われを運びぬ

— 天 —

夜の帳に百合のかをりをなづかしむ人を隔て
て月のぼりけり

— 五 —

花に寐るあはれやさしき愁人はよすがらもの
を怨じ給ひぬ

牧の草雫にぬる、朝々の柵に小牛の群を見る
かき

とれも一ば柱に垂る、白藤の花に別れし人を
泣かるる

遠人に待たるゝことをきづかしき心地こそす
れ初夏の雲

一語なく別れまつりしその往のねもひになほ
も君をみるかな

君を見るひと日につゞくのちの日のよろこび
待つと胸に花植う

牡丹咲く夕の門よなづかしきみくるま待ちぬ
母遠き家

夜の丘灯はかゝやかよ水をこゑ舟は草花の露
わけて来る

あゝわらし萬騎寄せ來と山の家窓の四方に戸
まらませけり

わかやかに君あみ給ふわいぎやうのやさしき
ねもひ百合愛でゝ居ぬ

ほどゝぎす夕日ぞすなる林中の古塔に白き葛
の花かな

牧の北まだらの牛の脊を並めて居こぞる彼方
遠山を焼く

晝の月小さま橋こゆなでしこの花咲く路に多
賀の城みる

磯づたひ藻の花かたる八月の月照る海に君と
わかれぬ

ほとゝぎす琴柱よ暮るゝ一夕のこゝろさびし
く君おるひけり

—三—

ひつじぐさ夕の欄にぬかよせて微醉にはてる
頬を吹かせけり

—三—

櫻貝み足の跡をなづかしみ砂ましろなる磯に
出でけり

みて過ぐる南の湖の對岸に一路ついで花白
う咲く

ほとゝぎす柩よ釘しものうくも暮るゝ日を待
つ夕となりぬ

ねん香や髪梳く人は白き頬を壁にうむけぬ山
ほとゝぎす

胸の海いとおだやかに風さわたり暮れんとす
なるさびしみに居ぬ

君が家は花たちばの風かそり翠柱に遠き夏の
山見る

海鳥の白尾にながきしづくして夜明の國に帆
は生れけり

— 詩 —

大早胸の花萎ぬこゝろ死すひと日たまたま君
を見ざれば

— 五 —

あゝ懺悔神を欺く魔の群を聖壇に見る夜の燭
かな

草高き夕の丘をながめつゝくるまは過ぎぬ牧
のうしろを

夏の雲七つの峯を窓にみる樓の鏡に頬は並び
けり

旅たびころも七日ななかばかりを鐘かねに寐ねて鐘かねを數かぞへて人
と別わかるゝ

日暮ひぐしれぬわれなる胸むねのさびしさの一ひと縷いとをのこ
したなびける雲

夜よの磯いそ燭あかりさす船ふねの十とあまりの並ならぶなかに汐しほみ
ちにけよ

花あふひ終

明治四十年八月廿九日印刷
明治四十年九月三日發行

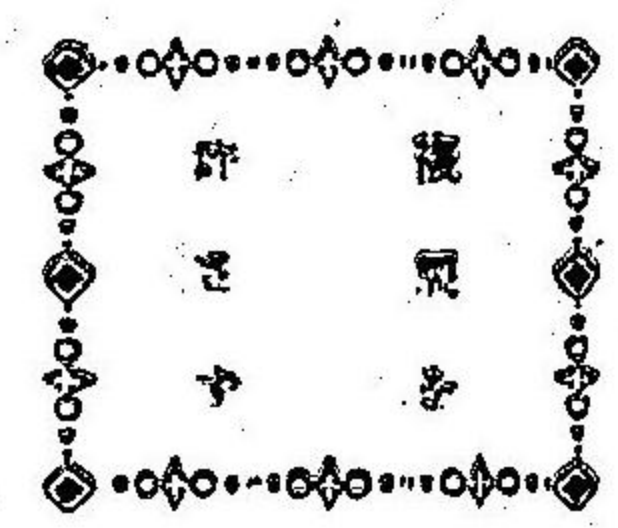
(定價金貳拾五錢)

編者 山中省二

發行者 伊藤榮助
仙臺市北一番丁五十五番地

印刷者 齋藤善四郎
青森市因分町百四十三番地

印刷所 江馬活版所
仙臺市因分町百四十三番地
電話 二五七番



發行所

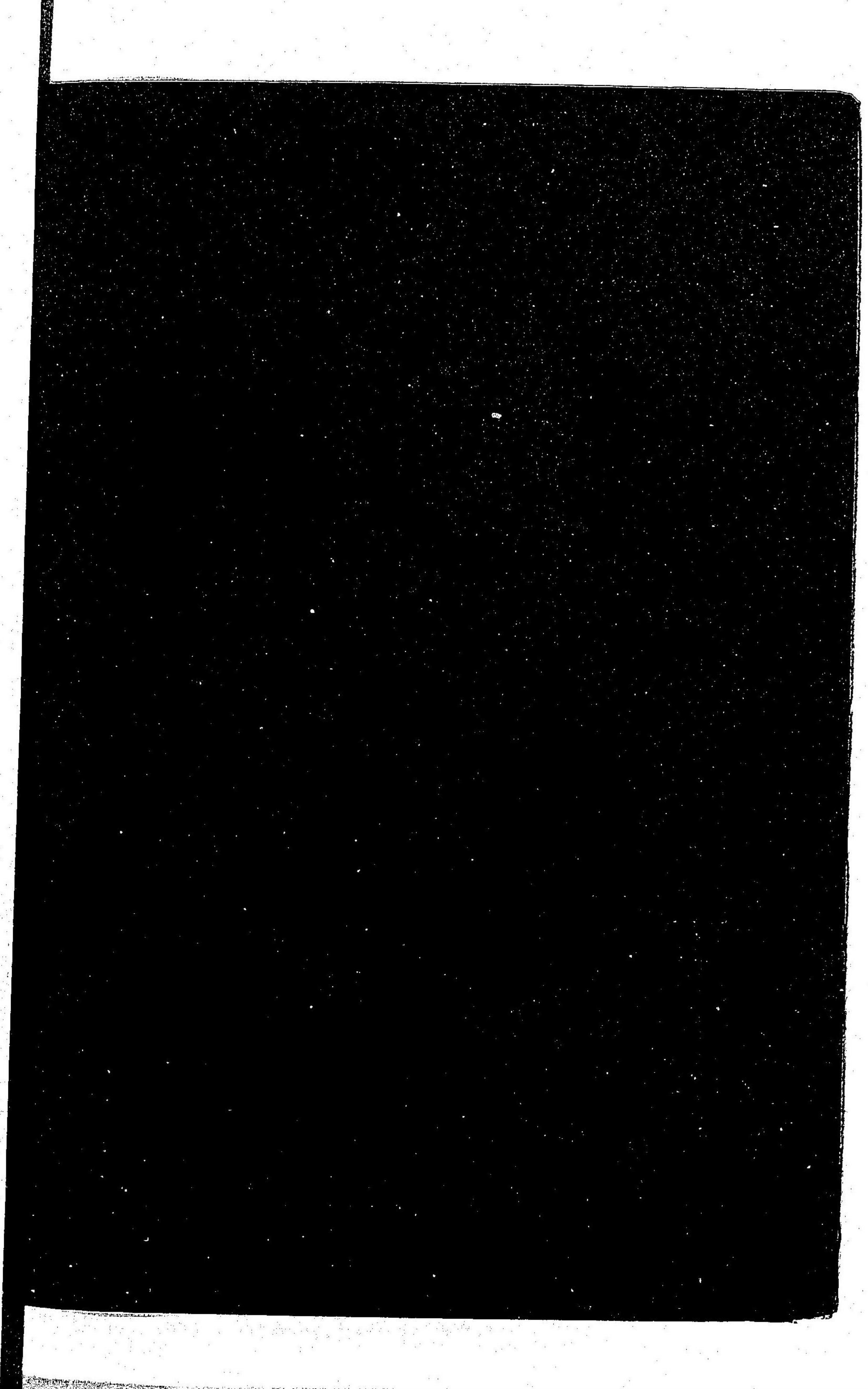
夕潮會出版部

仙臺市長丁十一番地

258
149

誤 正

頁	誤	正
四	老駕心	老駕
一八	大古	太古
二四	谿間より	谿間より
二四	病める	病める
三一	狩衣	狩衣
三四	網賣る	網賣る
三八	洞落の	洞落の
五九	怨し給ひぬ	怨し給ひぬ



特 72
2

301544-001-3

特 72-2

花あふひ

山中省二 / 編

M40.9

DBD-0001

258
149